

会長就任に当たって —大いなるナショナリスト福澤諭吉—



会長・拓殖大学顧問 渡辺利夫

福澤諭吉の問題意識が最も鮮明な時期、知力旺盛な40歳の時に、その知力の限りを尽くして書きあげた大作が『文明論之概略』です。多くの読者は、福澤の『文明論之概略』とは、日本の文明化をいかにして進めるかを説き、日本の文明開化の必要性を正々堂々と論じた傑作だという、広く流布されているイメージをおもちだろうと思います。しかし、そのイメージ実は正しくはありません。

『文明論之概略』の最も重要な結論部で福澤は、目的は日本の独立であって、文明はそのための「術」であると主張します（現代語訳：渡辺）。

「現代の日本人が文明の方向に歩みを進めるのは、日本の独立を確保するだけのためである。それ故、国の独立こそが目的なのであり、国民の文明はこの目的を達成するための術なのである」。

「国の独立は目的なり、今の我が文明はこの目的に達するの術なり」というのです。『文明論之概略』で福澤は、「文明の物たるやを至大至重、人間万事皆この文明を目的とさせるものなし」といった類の表現を何度も使い、人類が到達をめざすべき極致が文明であることを繰り返し述べておりま

す。しかし、この福澤にあっても、文明は到達すべき「極致」であって、すぐにこれが手に入るわけではない。文明の極致を遠い目標としつつ、目下の最大の課題は独立であり、この独立のための手段として文明を捉えるべきである。思考の順序を取り違えては絶対にならない、というのが福澤の思想の根本なのです。

そして福澤は一国が独立を保つためには兵力の強化以外に方途はないと言い、あけすけにも次のように喝破しています。

《百卷の万国公法は数門の大砲に若かず、幾冊の和親条約は一筐の弾薬に若かず。大砲弾薬は似^もって有^ある道理を主張する^{そなえ}の備^{あら}に非^つずして無^きき道理を造^{つく}るの器械^{きかい}なり》

軍事力というものは道理を主張するための備えというよりは、逆に存在しない道理を、あえて造り出すための力だということです。中国をみよ、ロシアをみよ。150年前の福澤の論説に学ばなければならないのは現在のわれわれではないのか。

JFSSの会長就任に当たって、心しなければならぬ福澤の警鐘を述べてみました。